

国立大学協会総会（3月7日）

「東京大学の「入学時期の在り方に関する懇談会」（中間まとめ）等について」
（濱田東京大学総長・国立大学協会会長発言概要）

最初に、私の方からいまの考え方などをお話し申し上げ、皆さまからの意見交換の材料としていただければと存じますが、基本的なところは、さきに2月13日に国大協理事会でお話し申し上げたとおりです。この概要については、すでに皆さま方のところにお届け申し上げていると思いますが、改めて今日の資料の中にも入れていきますので、重複を避ける形で手短にお話し申し上げたいと思います。なお、さらに資料として、先般、古川国家戦略担当大臣と面談した折に持参した私の手紙も入れていきます。これは、内閣官房に設けられている「グローバル人材育成推進会議」の動き（秋入学導入の検討の試みを大いに評価、関係大学の自主的・自発的な議論の実りある進展を大いに期待する、政府部内でも課題等の解決に向けて幅広く検討を開始する、等）を受けたもので、古川大臣からはしっかり支援をしていきたいというお話をいただきました。

秋入学についてはいまいろいろな形で話題になっていますが、これは、秋入学がたんに入学時期、学事日程を変更するというだけでなく、一つには、グローバル化の荒波を生き抜く若者を育てるという総合的な教育改革のシンボルという意味を持っていること、もう一つは、グローバル化の動きに対応する大学の改革と同時に社会の改革へのいわば「リセット」型のメッセージを含んでいること、この2点のゆえであろうと思います。私たちは、大学の当然の役割として、10年先、20年先、30年先の社会を見据えながら、この2点を意識して改革への取組みを加速させていくことを、社会から強く期待されていると感じています。

後者の点について言えば、秋入学という構想は、これまで社会が当たり前だと思ってきた、しかし、ひょっとして合理性を失って硬直化しているかもしれない社会的な仕組みに対する、大学からのチャレンジを含んでいます。それは一言で言えば、大学も社会も、グローバル化の中で世界と同じ平面の上でのヒト・モノ・カネの流通と競争という大変動の中に置かれることを覚悟して、それに対応できる人づくり社会づくりのためにマインドセット（習性となった物の考え方）を切り替えて、一緒にやろうということです。私たちが学生を送り出していく社会の在り方について働きかけを行うことは、大学としての責任であると思います。こうした社会システムやマインドセットの変革を促すことは、秋入学のメッセージが持つ大きなプロフィットです。この点を見過して、狭い

視野で入学時期の合理性だけ議論していると、社会の期待を損なうことになると思います。

また、前者の点について言えば、秋入学の構想は、入学時期の変更とともに、それを実現していくプロセスで、さまざまな教育改革を巻き込み盛り上げていくことに大きな意味があります。その教育改革とは、私たちの言葉で言えば「よりグローバルに、よりタフに」ということを焦点に置きながら、国際化のための取組みはもとより、入試改革や教育の内容・方法の質向上なども含みこむべきものです。東京大学の動きとして、秋入学構想が突出して注目されていますが、入試改革についても基本的な叩き台が固まりつつありますし、教養教育の強化、カリキュラム改革、国際化のためのインフラ強化など、ここ数年の間に多くの改革が連動して展開されることになると思います。秋入学の構想は、教育改革としては、こうした一連の改革と連動してこそ実質的に意味あるものとなるし、またそうした一連の改革の動きを加速させる効果を持っていると考えています。

同時に大事なこととして、すべてを一挙に実現しなければいけないと固く考えすぎると物事が動かなくなります。教育改革について全体感を持ち、全体設計を行い、全体としての取組みをすすめる中で、ある部分の改革が先行することは当然あってよいと思います。

また、秋入学という大きな改革を目指すプロセスの中で、その先取りの取組みは、いずれにしても進めていくべきだろうと思います。一足飛びに秋入学を実施するというのは、社会の仕組みや慣習・心理の変化とただちに連動できない可能性もあり、トライアルの積み重ねが必要です。別の面から言えば、秋入学の実現まで何もしないというのもおかしな話です。社会は一日も早く、より質の高い人材の育成を待ち望んでおり、秋入学の本格的な実現を待たずとも、出来るところから教育改革を少しでも早くすすめていくべきだと考えています。

私は「秋入学」の取組みというのは、こうした大きな教育改革、さらには社会改革のうねりの中に位置づけられるべきものであり、そうした意味では、各大学が、その個性・特色を生かして入学時期などに関して多様な取組みを構想し始めておられることは、細部の形の違いを云々するよりも、こうした大きな変革のベクトルの上に位置づけて理解されるべきものと思います。まして、いまの段階で、秋入学に賛成か反対かという単純な図式で議論するようなことでもないと考えています。

私としては、東大総長としての立場でこのように考えていますが、国大協会長という立場でも同じように、この問題については、総合的な教育改革という大きな視野を持って、各大学の個性・特色を生かしながら、また必要に応じて幅広い連携も探りながら、主体的に検討と具体的な取組みを行っていただくのがよいと考えています。そうした取組みのためのベースとなる基本的な情報や課題をめぐる議論について、国大協の全大学できちんと共有できるようにしたいと思います。このような考え方については、さきの理事会でも発言させていただきましたが、教育・研究委員会での取り扱いについては、先日、濱口委員長とご相談をさせていただき、広く教育改革全般の視点から入学時期、入試改革、国際化や教育の質向上なども含めて議論を行っていただければと思っています。必要に応じて、入試委員会など他の委員会でも議論いただくこともよいかなと思います。さらに今日皆様からご意見をいただいた上で、今後の取り進め方を考えたいと思います。それでは意見交換をよろしくお願いいたします。